

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第26回

SDGs 未来都市・環境モデル都市
ニセコ町の未来をつくる取り組み

北海道ニセコ町 副町長 山本 契太

地域で取り組む多様性を育む教育

北海道ニセコ高等学校 教諭 中谷 知記

Supported by  日本財団 THE NIPPON
FOUNDATION

2021年7月

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第26回

SDGs 未来都市・環境モデル都市
ニセコ町の未来をつくる取り組み

北海道ニセコ町 副町長 山本 契太

地域で取り組む多様性を育む教育

北海道ニセコ高等学校 教諭 中谷 知記

講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」の 講演会記録(第26回)の刊行に寄せて

白山 利信

筑波大学人文社会系教授・NipCA プロジェクト実務責任者
グローバルコミュニケーション教育センター長

今年度で3年目を迎えた筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」は、2019年1月、文部科学省「大学の世界展開力強化事業(ロシア)」の本学の採択事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」(2014-2019)の成果とノウハウを引き継ぎ、新たなミッション(中央アジア及びアゼルバイジャンを中心とした中央ユーラシア地域のSDGsの達成と当該地域社会の課題解決に貢献できる人材の育成)を担ってスタートしました。初年度下半期の事業案件を進めていた2020年1月から3月までの期間に、新型コロナウイルスのパンデミックによって計画のすべてが変更を余儀なくされましたが、活動形態をオンラインに切り替えることで、プロジェクト活動を着実に推進することができました。NipCAプロジェクト主催の公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズもそうした事業のひとつで、Zoomによるオンライン開催に切り替えて行いました。オンラインという形態によって聴講者数が増加し、毎回60~80名あまりの聴講者に参加していただきました。聴講者から講演内容が非常に充実しているの、冊子として読みたいとの多くの声を頂戴しました。そこで、本プロジェクトの社会貢献の一環として、講演会記録冊子として刊行することにしました。

本冊子に収められているのは、通算で第26回目になる「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会「SDGsと多文化社会—先駆的な試みを行う北海道ニセコ町—」の全体を収録したものです。今回は初めての試みとして、お二人の講師を同時にお招きしてSDGs未来都市にも選定されているニセコ町の先駆的な試みを多角的に紹介する機会を設けました。講師を務めていただいた、北海道ニセコ町副町長の山本契太氏と北海道ニセコ高等学校教諭の中谷知記氏、またモデレーターを務めていただいた日本語政策学会会長で、麗澤大学教授の山川和彦氏に深く感謝申し上げます。

山本副町長には、「SDGs未来都市・環境モデル都市ニセコ町の未来をつくる取組」と題して、環境を生かし、資源、経済が循環するニセコ町のまちづくりについてお話いただきました。多くの外国人を惹きつけ外国人移住者も多いニセコ町では、インターナショナルスクールを誘致し、地元ラジオ局に国際交流員を配置するなど、外国人も町民として多様なあるまちづくりに参加することが求められています。今後は、町外から集まった投資をニセコ町の中で内部循環させていく仕組みづくりが課題として挙げられていました。

元々のニセコ町民とニューカマーである外国人住民等との間で、摩擦がまったく生じないわけではありません。しかし、ニセコ町ではその摩擦を「創造的摩擦」と称して、摩擦は当たり前であり、摩擦こそが交流の第一歩だという認識に立っています。摩擦を肯定的に捉える逆転の発想で、外国人住民や日本人移住者等を積極的に受け入れています。この「創造的摩擦」という発想は、多様な言語・文化的背景をもつ住民が共生する地域社会において、今後ますます大切になる、非常に有益な考え方だと感じます。また「誰一人取り残さない」というSDGsの根本理念の具現化にも通じていく考え方だと確信します。

続いて、中谷先生には「地域で取り組む多様性を育む教育」と題して、ニセコ町立の北海道ニセコ高等学校の緑地観光科グローバル観光コースでの様々な取り組みについてお話いただきました。同校では、数多くの外国人観光客が訪れる、観光資源豊かなニセコ地域で活躍するグローバル人材を育成する一助として、地域おこし協力隊などの地域のグローバル人材による講話や、国際交流員との交流授業が実施されています。昼間定時制による高校4年制という非常にユニークな就学形態もあり、コロナ禍の中、生徒たちは、ニセコワイナリーやインターナショナルスクール等での研修に参加することで、自ら考え、発言・行動し、外国人を含む他者と協働して業務を遂行する実践的な経験を積み、地域の課題を世界の課題として捉える視座を持ったグローバル人材としての素養を深めています。

今後もNipCAプロジェクトの講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」は、基本的にすべて冊子化を予定しております。昨年度は日本語版と英語版の講演会冊子を刊行いたしました。今年度は、すでに第11回講演会冊子のモンゴル語版を刊行するなど、さらに多言語化を目指しておりますので、どうぞご期待ください。

最後になりますが、日頃から筑波大学NipCAプロジェクトを陰に陽に温かく支えて下さっている公益財団法人日本財団の森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、国際事業部の沼田雅子氏、そして日本・中央アジア友好協会(JACAFA)のヴルボスキ京子会長に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

白山 定刻になりましたので、第26回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会をこれから始めさせていただきますと思います。

はじめに簡単に開会のごあいさつをさせていただきます。私は筑波大学人文社会系教授でグローバルコミュニケーション教育センター長をしています白山利信と申します。よろしくお願いいたします。また、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA プロジェクト)」の実務責任者をしています。

本日の講演会は「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」が主催組織となっておりますが、日本語政策学会多言語対応研究会も共催組織として名を連ねています。加えて、日本・中央アジア友好協会、本学の国際局、学生部、グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会、SGU 事業推進室、グローバルリーダーシップ教育プログラム、人文・文化学群、社会・国際学群が協力組織となっております。

この NipCA プロジェクトの講演会は公開となっております、社会貢献活動の一環として位置付けております。このプロジェクトでは中央アジアと日本を自在に行き来し、当該社会の発展のために活躍できる人材育成に取り組んでいます。そして、将来のキャリアパスに役立つテーマを選んで、中央アジア出身の留学生たちおよび日本人学生が日本の国内事情、中央アジア社会の諸課題、世界の SDGs (持続可能な開発目標) の達成に寄与する取り組み等をより深く理解するための機会として、この公開講演会のシリーズを実施しています。

本日は共催の日本語政策学会会長である山川和彦先生にモデレーターをお願いしています。現在、日本の地域社会におきまして、観光客として、住民としての外国人が年々増えています。それに加えて、山川先生のご研究から明らかになったように、その中間的な外国人も存在しており、外国人の多言語対応という観点から、多文化共生社会のための言語政策について、日本社会全体が考えていかなければならない時代に入っています。多文化共生時代の到来を見越した対応を社会全体で考える必要があるという共通の問題意識から、この NipCA プロジェクトと日本語政策学会多言語対応研究会との連携協力ということで今回の講演会が実現しています。

第26回目の講演会となる今回は「SDGs と多文化社会 —先駆的な試みを行う北海道ニセコ町—」というテーマで、ご多忙の中、山本契太ニセコ町副町長とニセコ高等学校教諭の中谷知記先生をお迎えいたしました。ニセコ町は SDGs 未来都市にも選定された、日本の自

治体として SDGs を強力に推進するトップランナーの地方自治体であり、さまざまな取り組みを進めていらっしゃいます。今日はその取り組みの詳細についてお話を頂けますので、私自身も、しっかり学んでいきたいと思っています。

以上、簡単ですが、開会のあいさつとさせていただきます。それではモデレーターの山川先生にバトンタッチいたします。山川先生、よろしくお願いいたします。

山川 白山先生、ありがとうございます。今、白山先生からいろいろご紹介していただいたとおりです。NipCA プロジェクトと筑波大学との関係で申し上げますと、実は2019年12月に NipCA プロジェクトの一環で、私は非常勤講師という立場で中央アジア諸国からの留学生とニセコ町および周辺の町に伺いまして、今日、ご出演いただいているニセコ高校にもお邪魔しました。町内の幾つかの施設等にも伺い、学生たちにとっては非常に大きな学びだったという話を聞いています。そういう意味で、今日は山本副町長と中谷先生からニセコ町に行っている先駆的な取り組みを直接伺えるという非常に画期的な機会だと思っています。

私があればこれ話すよりはお二方にお話を聞いて、その後、質疑応答の時間をできるだけ多く取りたいと思いますので、早速始めたいと思います。最初に「SDGs 未来都市・環境モデル都市 ニセコ町の未来をつくる取り組み」ということで、ニセコ町副町長の山本契太様よりお話を頂きたいと思います。その後、「地域で取り組む多様性を育む教育」ということで中谷知記先生よりニセコ高校の取り組みについてお話を聞いて、講演が終わった後、15分から20分ぐらい質疑応答を行い3時には終わりたいと思います。それでは山本副町長、よろしくお願いいたします。

山本 (契) よろしくお願ひします。ニセコ町の山本でございます。短い時間ですが、ニセコ町の取り組みについてお話をさせていただきたいと存じますので、今日はよろしくお願いいたします。2時15分ぐらいまでということなので、少し駆け足になるかと思いますが、早速お話をさせていただきたいと思います。

初めのこの写真が何をしているところかという、「2018年12月 NISEKO 雪崩ミーティング」で、本町の取り組みの象徴的な写真と思い、用意しました。ニセコにはスキー場がたくさんありますが、スキー場の外でパウダースノーを滑ることが人気が、まず世界各国から人が来るきっかけになりました。ただ、昔から外を滑ることによって雪崩の事故に遭うことがあるものですから、



ニセコ町の概要

人口：
2021.6月/4,927人(外国人273人)
2020.1月/5,419人(外国人660人)

面積：197.13km²
(山手線内側の約3倍)

高齢化率：27.2% (2015国勢調査)

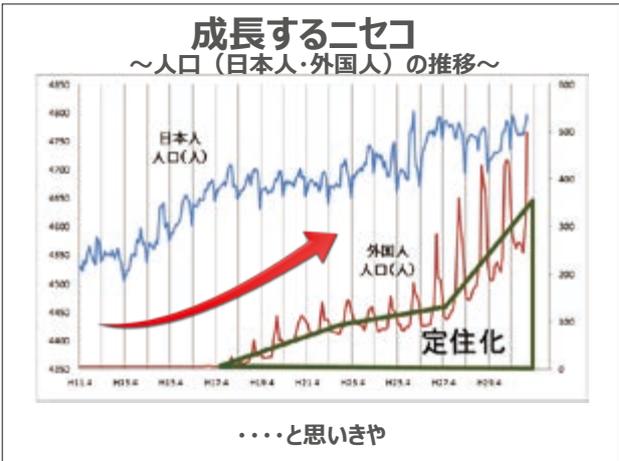
財政規模：49億1,000万円
(2021年度一般会計予算)

財政力指数：0.30

議員数：10名

職員数：95名 (特別職除く)

主要産業：観光を中心としたサービス業、農業



スキーヤーの皆さんや関係者の人、それこそ若若男女が集まって、年に1回、いかに事故を防ぐかというミーティングをやっています。

ニセコ町がどこにあるかという北海道の中のこの辺です。海あり山ありで、風光明媚なところにあります。

ニセコ町の概要です。今年6月末現在の人口は4,927人、うち外国人が273人です。昨年(2020年)1月の人口は5,419人、うち外国人が660人でした。これを見ていただくと「何だ。とんでもなく人口が減ったじゃないか」となりますが、実は冬に外国人の方がどっと増えることによって人口が増え、夏に減るということを繰り返しています。4,927人はさすがにコロナの関係で少し減っているという状況ですが、今はこの辺りで落ち着いています。

右側のグラフはニセコ町の地方創生総合戦略、いわゆる人口減少の対策をつくったときの人口推計で、将来にわたって5,600人から5,800人ぐらいまで人口が増えるだろうと予測しています。赤い線が実際の人口の推移で、予定より早めに赤い線が伸びて、コロナでどんと落ちています。これが今のニセコの状況です。

ニセコは転入してくる方がたくさんいらっしゃいます。

転入理由を調査してみると面白いのが「自然が豊かだ」や「静かだ」が上位。田舎ですから当たり前ですが、3番目に「ニセコだから」が理由となっています。町のブランディングが効を奏していると考えています。

「成長するニセコ」ということで、上の青い折れ線が日本人の人口、下の折れ線は、冬に人口が増えて夏に減るといふ外国人の人口で、上昇傾向となっています。ただ、コロナの状況で、今は冬も夏も人口がどんと減って、大変な状況になっています。

外国人はこれまで右肩上がりですどっと来ていて、同時に開発も進んでいきましたが、去年は外国人が183人でした。これまでと比べるとどん底まで落ち込みました。コロナが明けたら、また戻ってくるとは思っていますが、今はとても苦戦している状況です。

富裕層向けの開発については堅調で、世界のいろいろな投資が進んでいる中で、来年、再来年に、また外国人がニセコに戻ってくるという期待があります。

本町にはニセコアンヌプリという山があり、この山にスキー場がつくられています。スキー場の経営は外資と日本の資本が混在している状況です。

今日のお話の中心ですが、このようなニセコ町が何を

大事にしてまちづくりをしてきたかということです。ニセコ町にはまちの憲法と呼ばれる「まちづくり基本条例」があります。まちづくり基本条例は憲法と同じく立憲主義に基づいています。主権者である国民が憲法を通じて国をコントロールするように、ニセコ町もこのまちづくり基本条例を通じて、主権者である町民が役場や議会の暴走を防いでいます。あまり暴走したことはありませんが、そういう制度になっています。

このまちづくり基本条例には大事にしている柱が2本あります。情報共有と住民参加です。民主主義の中でどうしても欠かすことのできないものは「情報」だと我々は思っています。住民の皆さんが行政と同じ質で同じ量の情報を持って、まちづくりに参加することで、役場の中にはない、さまざまな知恵がまちづくりに反映されていくことがとても重要です。徹底して情報の公開を進め、その情報を基にして住民参加を行っていくことがニセコ町のまちづくり基本条例の柱です。

この写真はニセコ町長の片山が、まちづくり基本条例第26条に則りニセコ町まちづくり基本条例を遵守することを宣誓している写真です。

次に、今日のテーマに即した具体的な取り組みを少し

紹介させていただきます。住民参加と情報共有ということで、例えばこの写真は来年度予算のヒアリングの様子です。町長ほか関係者でヒヤリングをしている後ろに住民の皆さんが見ている様子です。このように予算をつくっていく過程において、当たり前に住民参加をしています。

この写真は、全戸に配布する予算書です。年に1度、1年間の町の仕事を「もっと知りたいことしの仕事」という冊子にして、町民の皆さんにお配りしています。予算という大事な情報は役場と議会の中で話し合っているだけではいけないと考えています。

準都市計画という土地利用の規制についても町民の皆さんと一緒に話し合ってきた歴史があります。開発が進む昨今、昔、皆さんで話し合った準都市計画のルールが今になって役立っています。

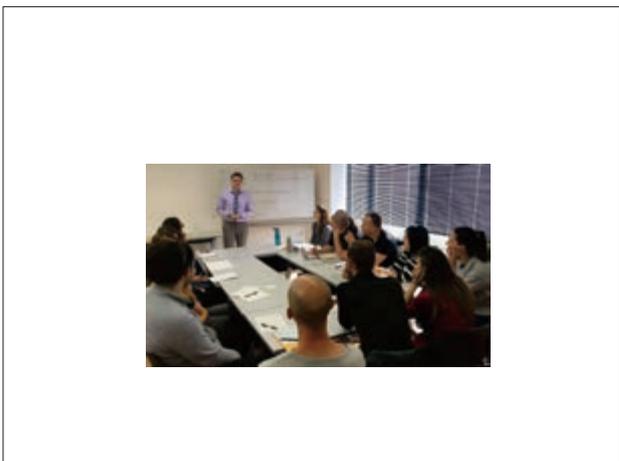
併せて、概ね月に1回、町の課題をみんなで話し合う町民講座を200回を超えて実施しています。

唐突ですが私は、本日の講演会の要点は多様性だと捉えています。ニセコ町の特徴も多様性です。町民の皆さんにうかがっても「ニセコの良さって何だ？」と何うとやはり「多様性だ」という方がたくさんいらっしゃいます。

例えば国際化するニセコということで、札幌にある北海道インターナショナルスクールが2011年から本町に進出しました。元幼稚園を改装し、活用しています。

なぜインターナショナルスクールを誘致したかということ、外国人の方もたくさんいらっしゃる中で、日本人の奥さんとオーストラリアの旦那さんというパターンが多く、いずれ旦那さんの故郷に帰る際、ニセコで生まれた子どもたちが英語を話せないというのが致命的だということで、何とか学校をつくってほしいという要望の下に町が誘致しました。これは多様性を受け入れる一つの手





法だと思っています。

それから、本町ではコミュニティーFMのラジオ局を持っています。2012年に開局しました。小さなラジオ局ですが、テーマが「聞くだけじゃない、出るラジオ」です。とにかく住民などが出演して、自分の主張をすることによって、いろいろな方とつながっていくということが一つのコンセプトになっています。私は聞いても分からないのですが、町民である外国人の方も、当たり前英語でボランティアパーソナリティーをされています。皆さん、好きなように出演して、好きなようにお話をされる「出るラジオ」というところがポイントです。

もう一つ、ニセコの多様性を支える大事な人材として、国際交流員という方々が役場に在籍しています。CLAIR(自治体国際化協会)という組織の事業を通じて、日本語が堪能な外国人の方に来ていただいています。現在は5人が在籍しています。この5人が言葉は悪いですが好き勝手にいろいろなことをしていて、それがとても楽しいというか、ニセコ町らしいいろいろな取り組みに広がっています。

例えば絵本ワールドは、世界から絵本を集めてきて、

ニセコの子どもたちやお母さん方に読み聞かせたり、展示したりします。毎年実施していて、とても人気のあるイベントです。

それから国際交流員によるラジオ出演です。自分たちでニセコのPRにつながるラジオ番組などを受け持っています。

それから、国際交流員が日本語の教室をやっています。ニセコで働く外国人の皆さんが職場で困らないようにと開催しており、とても人気があります、コロナ禍になるまでは70人を超える参加状況でした。

それから学校訪問。これは当たり前のように、自分たちでいろいろな学校に出向いて、自国のPRや児童生徒との交流を深めています。

それから世界のお祭りを模したイベントを実施しています。多様な取り組みがあり、私自身、全てを把握しきれていません。

一覧表にするとこのような感じです。とても大きな効果があると感じていますが、ニセコでは、子どもたちはもう、生活の中に外国人がいることが普通で当たり前という状況になっています。

次に、ニセコ町の取り組みとして紹介しておきたいの



活動状況	
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 国際交流員が主催した交流イベント ・ワールドカフェ (年4回) ・ワールドまつり (年1回) ・ランニングギルド (月1回、計4回) ・漫画・デッサンクラブ (計7回) ・たべようNiseko (年2~3回) ・マイ・クワイア (月2回、計12回) ・中国文化講座 (計6回) ・クリスマスポットラックパーティー ・絵本ワールド (年1回) ・近藤小学校料理教室 ・中華風切り絵ワークショップ (計3回) ・キッズイングリッシュツアー ・聖マルティヌスとランタン之夜 (ドイツの伝統行事) ・ワールド・キッチン@ホーム (月1回) ◆ 国際交流員が協力した町のイベント ・ニセコ高校祭 (年1回) ・放課後教室: E-Time (月2回) ・ニセコハローウィン (年1回) ・あそぶっく祭り (年1回) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 言語教室 ・英会話Talk! (月2回) ・初級&中級中国語教室 (週2回) ・初級&中級日本語教室 (週3回) ・日本語ボランティア養成講座 (計10回) ・言語交換プログラム (計2回) ◆ 多言語による絵本読み聞かせ「インターナショナルリーディングプロジェクト」 ・学習交流センターあそぶっく (月1回) ・インターナショナルスクール (月1回) ・ニセコ小学校 (年1回) ・近藤小学校 (年4回) ◆ 情報発信事業 ・ニセコ町国際交流新聞の発行 (月1回) ・町HPやニセコFRIENDSのSNSでの情報発信 ・多言語サービス資料の配布 ◆ ラジオ番組 (週1回) ・「出役! この街って天国?」 ・「English Radio Hour」

が地域おこし協力隊です。2021年で26名が在籍しています。定住率は73%と、全国平均からすると飛び抜けて多い状況です。3年間の地域おこし協力隊活動を終えて、73%ぐらいの人がニセコに残られるということは大変ありがたい話です。公共施設の管理を行う会社を立ち上げた方もいれば議員になった方もいらっしゃいます。今は町の森づくりに奔走する方もいらっしゃいます。

お土産品の開発やPRも当たり前のように取り組んでいます。ニセコは夏になると日に三つぐらいのイベントが重なることもあります。これらイベントの担い手という意味でも地域おこし協力隊の皆さんは欠かせない人材となっています。定着する人とならない人とは、いかに自分をPRして町に溶け込めるかどうかが鍵だと感じます。できるだけコミュニケーション能力の高い人を選抜しています。

多様性という意味で、ニセコ町ではふるさと納税を国の制度が始まる前から実施しています。今の返礼品合戦には乗りたくないとは実は思っているものの、今となつてはやらざるを得ないところもあります。ニセコでは寄付をしてくださった方の申し込みによって、「ふるさと住民票」をお配りしています。このカードは「あなたは

もう住民です。いつでも帰ってきてください」という、寄付者とのつながりを持つ取り組みです。一般的には、カードに特典が付くという発想をするかもしれませんが、ニセコ町の場合はそうではありません。このカードを持つ条件の一つは、ニセコ町を心のふるさととして愛し続けていただくこと。二つ目が、持ち主自身が町の情報を取得するよう努め、ふるさとニセコに何が貢献できるかを考えていただくこと。「あなたはお客さんじゃない。町に何ができるか、考えてほしい。一緒にまちづくりをしましょう」という呼び掛けをしているという取り組みです。

次に、SDGsの取り組みということで、ニセコ町は2018年6月に国から「SDGs未来都市」に選定されました。SDGsの取り組みについて、最後に一つだけご紹介をして終わりたいと思います。ニセコ町は情報共有、住民参加、それから環境を守る、水を守る、地下水を守る、資源を守るなど、様々な取り組みをしてきたものですから、そこがSDGsのゴールととても親和性があり、SDGsの取り組みに違和感はなく、取り組みを始めやすかったといえます。

ニセコ町の今の課題は、町外からの投資はたくさんありますが、一方で民間消費や調達を町外に頼っているということがあります。お金が内部循環していないのです。そこを何とか循環させたいという一つの課題があります。強いて言えば、漏れバケツの穴をふさぎたい。ニセコ町というバケツがあつて、上からお金という水が入ってくるのですが、電気代、灯油代、ガソリン代、携帯電話とさまざま、どんどんニセコ町外に水(お金)が漏れてしまいます。これを何とかふさがなければいけません。それによって循環を強化していくということです。

それからもう一つ、ニセコ町はSDGsに沿って、CO2の削減にも努めています。2020年の7月に気候非常事



態宣言をし、これまでは86%削減としてきましたが、2015年に比して2050年までにCO2を100%削減するという大きな目標を立てました。

ニセコ町のCO2は主に建物由来のものが約70%です。例えば家庭や事業所などの建物で使う電気や暖房ですが、ここに切り込んでいかなければニセコ町のCO2は減らすことができません。そこで、これらに取り組む新しい会社を2020年7月に立ち上げました。官民連携の事業主体で、CO2の削減やエネルギー関係、不動産による高気密・高断熱の建物を推進する会社です。

この会社がまず初めに手掛けていることが、高気密・高断熱でエネルギーをなるべく使わない住宅群の建設です。電気そのものも一括受電をしたり、コージェネレーション¹を活用して、効率よく住宅群にエネルギーを供給するなど、ニセコ町の住宅不足の解消、建物由来のCO2削減など、電気もある程度、自分たちでまかない、住宅に供給する取り組みです。そのような住宅群をSDGsのモデル事業として取り組んでいます。

山川 山本副町長、ありがとうございます。私がお願いした25分ぐらいという大変難しい条件の中でお引き受けいただきました。

それでは続きまして中谷先生にニセコ高校のほうの取り組みをお伺いし、後ほど今のニセコ町の取り組み等のことも含めてご質問を頂ければと思います。それでは、中谷先生、お願いいたします。

中谷 それでは、副町長に引き続き「地域で取り組む多様性を育む教育」ということで、北海道ニセコ高等学校の話をしていただきます。中谷知記と申します。よろしく申し上げます。私は商業科の教員で、本校では観光

¹ 熱電併給。天然ガス、石油、LPガス等を燃料として、エンジン、タービン、燃料電池等の方式により発電し、その際に生じる廃熱も同時に回収するシステム。



北海道ニセコ高等学校
緑地観光科グローバル観光コース
教諭 中谷 知記

国際環境リゾート都市にある高校

1. ニセコ高校の特徴
2. グローバル観光コース
3. 地域で取り組む多様性を育む教育活動

国際環境リゾート都市にある高校

1. ニセコ高校の特徴
2. グローバル観光コース
3. 地域で取り組む多様性を育む教育活動

ニセコ町の概要

人口 2021.5 4,943人 (うち外国人住民287人)
 2018.6 (夏季) 5,076人 (うち外国人住民262人)
 2018.2 (冬季) 5,295人 (うち外国人住民499人)

面積：197.13km² (山手線内側の約3倍)
 (田畑28.35km²、宅地2.38km²、山林原野132km²他)

「ニセコ」はアイヌ語で
 「深山にあって川岸にかぶさるように出ている崖」のこと
 昭和39年(1964年)に、「狩太町」から町名を変更
※住民基本台帳参照

を担当させていただいています。それでは本校の概要や取り組みを説明させていただきます。

国際環境リゾート都市にある高校として、三つ、まとめてお話をさせていただきたいと思います。まず一つ目に関してはニセコ高校の特徴です。先ほど副町長も言及されたように、ニセコ町は大変外国人住民が多い地域です。大体約6%の外国人がいます。そのため、ニセコ高校は英語や国際的な分野に力を入れていると思われがち

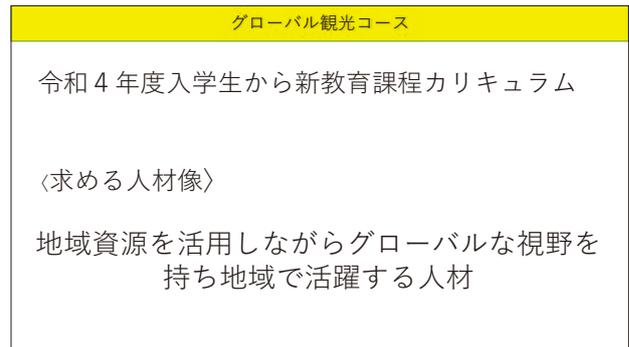
北海道ニセコ高等学校の特徴

- ・ 大学科「農業」
- ・ ニセコ町立の小規模校
- ・ 全国唯一の「緑地観光科」（33年前）
- ・ 2年次より
農業科学コース
グローバル観光コース
- ・ 昼間定時制→4年生を選択可



北海道ニセコ高等学校の課題

- ・ 入学生減少（とくにニセコ町内）
- ・ 英語の授業が圧倒的に少ない
※英語科目は3年間で9単位（現カリキュラム）
- ・ 地域で活躍する人材育成ができていますか？



国際環境リゾート都市にある高校

1. ニセコ高校の特徴
2. グローバル観光コース
3. 地域で取り組む多様性を育む教育活動

ですが、大学科は農業の小規模校です。また、ニセコ町立の高校ですので、ニセコ町としっかり連携しながら教育活動を実施しています。全国唯一の緑地観光科を33年前に設置しています。農業高校で観光という分野をコースで入れているのは珍しいです。2年生から農業科学コース、グローバル観光コースを選択して学んでいます。

もう一つの特徴としては昼間定時制²で、ほとんどは3年生で卒業しますが、中には1名から2名程度、4年制を選択して専門性を高める学びをしています。本校独自の取り組みも行っていますので、後ほど説明させていただきます。

ニセコ高校の課題としては、入学生の減少です。最近では普通科志向で、農業高校が選択されにくい部分がある
2 定時制とは、昼間に毎日毎週通学する履修形態（全日制）をとらず、特定の時間帯に継続して履修する形態のこと。定時制高等学校の昼間部（昼間定時制）は、全日制の単位制高等学校とほぼ等しい。

と思います。ニセコ町は国際色豊かな町にもかかわらず英語の授業が相対的に少ないことも課題です。また、しっかりと地域で活躍する人材の育成が十分にできていないという課題を抱えています。

続きまして、二つ目にグローバル観光コースについて説明をさせていただきます。2年生から分野別に農業と観光を選択できるようになっています。私はグローバル観光コースを担当していますので、そのお話をさせていただきます。

先ほど言及したように、地域で活躍するグローバル人材育成を目的として、今年度から観光リゾートコースからグローバル観光コースに再編しました。来年度から新学習指導要領の全面実施で新教育課程カリキュラムに変わりますが、ニセコの地域資源を活用しながら、グローバルな視野を持ち、地域で活躍できる人材育成を目的に教育活動をしていきたいと考えています。もちろん英語科目も増えます。また国際色豊かなニセコ町ならではの地域課題を解決するような科目も導入予定です。

ニセコにはたくさんの外国人が訪れていますので、もちろんグローバル人材の育成は不可欠です。それに加えて、ニセコ町は環境モデル都市やSDGs 未来都市に選定されています。ニセコ町の持続可能な観光地づくりをどのように進め、実現していくかという課題に生徒たちが向き合う契機になると期待しています。その中で最後の3つ目です。少し長くなりますが、地域で取り組む多様性を育む教育活動について幾つか紹介させていただ

環境モデル都市
(2014年選定)
SDGs 未来都市
(2018年選定)

持続可能な観光地づくり

多様性を認め合う人材育成



国際環境リゾート都市にある高校

1. ニセコ高校の特徴
2. グローバル観光コース
3. 地域で取り組む多様性を育む教育活動

国際交流員との
交流授業

地域のグローバル人材による講話

グローバルな感覚を身に着け、
世界を意識した問題解決能力の定着

目の様子です。学校設定科目の観光という授業で行っています。グローバル人材講話といっても様々な視点があります。あらかじめ打ち合わせをしっかりと臨みます。世界を意識したきっかけ、海外ならではの経験談、世界の課題、SDGs、特に多様性を意識した話になるようにお願いしました。初めての試みですので、講話後に内容等をしっかりと整理して、本校に合ったグローバル講話活動のあり方を模索していきたいと考えています。生徒に何が響くのか、生徒にどういうことが必要なのかということ吟味して、最終的にニセコ高校生にマッチした講話のコンテンツ化を図りたいと考えております。

きます。

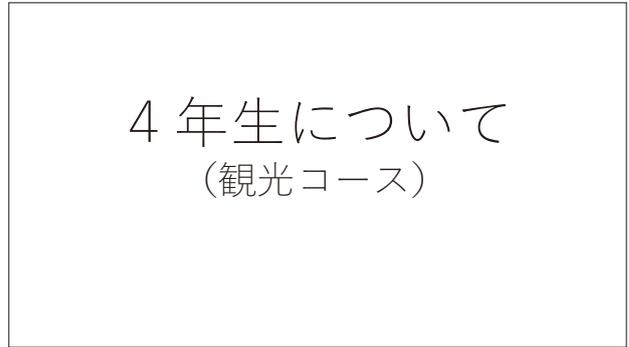
はじめに、地域のグローバル人材による講話です。グローバルな感覚を身に付け、世界を意識した問題解決能力を備えた人材育成活動の一環として、今年度の1年生から年7回の講話の開催を予定しています。海外経験豊富なニセコ町の地域おこし協力隊の方で、世界を何周も回っている方や海外のいろいろな団体に所属していた方に言葉、生活文化、宗教、民族・人種、世界観などの違いをどのようにして乗り越えたのかといった実体験を話していただくことになっています。

続いて国際交流員との交流(協働)授業です。先ほど副町長からも言及がありましたが、国際交流員の支援を受けた授業を実施しております。高校生が外国人の国際交流員と直にやりとりして一緒に協働学習する機会はとても貴重な体験になります。

ニセコ町には地域おこし協力隊員は26名おり、「ご自身の海外経験について生徒たちに話をしてもらえませんか」と依頼したところ、10名以上の方が「ぜひ協力させてほしい」と快諾してくれました。協力隊員の海外での苦労や成功、失敗にまつわる話は、生徒たちの、多様性に対するより深い理解につながると確信しています。

交流授業の一つにニセコ町で行われている恒例イベントの絵本ワールドがあります。多言語読み聞かせなどを通して、子どもたちの世界観を広げることを目的に実施しています。国際交流員や地域の絵本作家などが主体となり、高校生もボランティアとして参加して行っています。本来ならば、大ホールに100名程度ぐらいの親子が集まって、世界の絵本と多言語の朗読を聞くという機会がありましたが、昨年度はコロナ禍の影響でラジオニセコでの実施になりました。右上の写真は生徒が中国語、手前の方が日本語で朗読をしています。左の写真

この画像はグローバル人材育成講話の1回目と2回



はアメリカの方が日本語で、生徒が英語で朗読しています。文化背景の異なる国際交流員としっかりと打ち合わせをして朗読するという貴重な経験をすることができました。

今年度に関しては絵本ワールドのほかに、高校生が主体となって制作したラジオ番組「SDGsニセコ高校生による絵本ワールド」を実施しています。写真の手前の方が中国の方で、中国の絵本の読み聞かせをしています。「国際交流員との多言語の朗読」「多様性を認め合う社会の実現をめざす」「子どもたちと一緒に『世界観』を広げよう」というテーマで中国の絵本を選びました。「金魚の色が違うことは不思議ではないことだ。人も同じだ」という内容の中国の絵本を中国語と日本語で朗読しました。

この教育活動も、商業に関する学校設定科目³の観光

実践で行っていますが、商業科だけの先生ではなく、外国語科の先生にも入ってもらって実施しています。年4回を計画しています。

最後に4年生について説明します。高校4年生というのはイメージしにくいかもしれませんが、本校は希望制で4年生に進級することができます。

その目的の一つは、マレーシアでのホテル研修の参加です。この写真は2年前の研修プログラムで、6カ月間のYTLホテルグループ⁴でのインターンの様子です。右の写真は1カ月間研修したYTLホテルスクールでの集合写真です。ここでホテルのホスピタリティーやホテル学について学びました。左の写真は、上海レストランでの実務研修に参加した生徒たちです。

参加した生徒たちからは、「恥ずかしくてなかなか自分の意見を言うことができなかった。でも必死に英語でコミュニケーションを取った」「ホテルではマレーシアの人たちも英語で喋っていた。でも実際には、民族や母語が異なっていたり、宗教が異なったりしており、多様な背景を持っていました」「文化的な違いを理解することも大切だけれども、互いの共通点を探すことがもっと大切ではないかと感じた」などの声が聞かれました。差異や多様性を実際に感じると同時に、共通性の大切さへの気づきが見られ、海外でのホテル研修を通じて、生徒たちの世界観を広げる貴重な経験を積むことができました。

⁴ マレーシア最大のコングロマリット。

³ 学習指導要領で定められている科目以外に、教育上の必要から学校独自で設定できる科目のこと。



また、生徒の中には十分なコミュニケーションが取れず人の仕事までやってしまい、体が疲れて研修に支障をきたすことがありました。私がインターンの巡回に行ったとき、研修先の担当者から「もう少し自分の意思をはっきり言ったほうがいい、そうしないと評価されない」と指摘されました。積極的な性格の生徒でしたが、やはり海外に行くとは萎縮してしまったようです。

最後の2ヶ月間は、シミュレーションとしての訓練ではなく、実際に運営中のフロントに立ち、本物のお客さんに応対する研修です。お客さんの様々なリクエストに対して、誠実に、そして臨機応変に対応することが求められます。できることを主体的に考え、そのリクエストに応えるために迅速に動く。お客さんが尋ねた場所まで歩き、手作りの地図を作ったというエピソードも聞きました。生徒は、こうした現場の、生きた職業体験をすることができたと感じます。

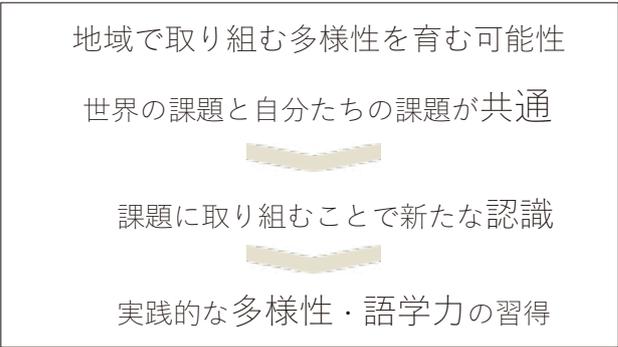
ホテルサービスや語学を学びたいというイメージでマレーシア研修を行った生徒も、研修を通して、文化や価値観の違いを肌で経験し、違いより共通点を探すようになり、考えも性格もいろいろ違っていても認め合うことが大切だということを学びました。高校生のうちからこのような経験を積めることは、生徒の人格形成や今後の人生にとって大きな意味を持つと感じました。

昨年度、今年度はコロナ禍の影響でマレーシア研修がありませんので、ニセコエリアで研修しています。このことが逆に生徒がニセコエリアの魅力や環境を知る貴重

な機会になりました。ニセコエリアでの研修は本当に充実した研修になっています。

手前の写真はニセコワイナリーでの研修のワンシーンです。このワイナリーのオーナーが、グローバル企業の勤務経験を持っており、国際感覚の豊かな人です。オーナーは、海外経験から培ったグローバルマインドの大切さ、特にオープンマインドの重要性を研修の中で生徒たちに伝えてくださいました。作業が機械的な流れ作業にならないように、常に考えて動くことが良い結果につながっていくこと、また新しいアイデアを日本人だけのものにせず、外国の方とも共有することが結果的に事業の発展につながる、社会貢献につながることを教えていただきました。地域に住んでいるドイツの方がこのワイナリーに顔を出し、生徒たちにドイツの話を英語で語ってくれるという出来事もありました。生徒たちは話の内容だけでなく、ドイツ語訛りの英語に触れて、世界における英語の多様性にも気づきがあったようです。

今年度は2名が4年生に進学して、ニセコワイナリーで研修をしています。ワイナリーで実際に研修したことと高校3年間で学んだ観光の知識を生かして、授業の一環として観光ツアーを考案しています。ニセコ町がSDGs 未来都市や持続可能な観光地トップ100にも選出されていることから、環境に負荷をかけないツアーを考案しています。生徒の企画・考案したニセコツアーを10月に教育活動の中で試験的に実施することを計画しています。将来的にはニセコ町のサステナブルツー



リズムの一つのコンテンツになればと期待しています。

さらに、ニセコ高校の近隣にあるインターナショナルスクールでも4年生の研修を実施しています。インターナショナルスクールは徒歩10分でいけるところにあり、アクセスしやすいことが大きな利点です。日本の学校とは異なり、インターナショナルスクールでは、双方向の教育スタイルが重視され、小学生の授業でもディスカッションが活発に行われます。黒板も使いません。哲学の授業も行われていました。放課後の課外活動の中国語教室では、ごく普通に英語で中国語を学ぶ児童たちの姿に新鮮な感覚を覚えました。こうした視察・交流研修を通して、ニセコ高校の生徒たちは、日本の学校と英語圏を基盤とした学校との教育文化の違いを学ぶことができたのではないかと感じています。

またコロナ禍の中、倶知安町の有名なホテルであるチャトリウムニセコさんから声をかけていただき、本校の4年生がインターンシップをさせていただく機会を得ました。外国人のスタッフと一緒に働くことは、高校生にとって得難い経験です。国籍も生活・教育のバックグラウンドも異なる人たちとの協働は、まさに異文化体験であり、多文化共生体験にほかなりません。実践的な英語を試す良い機会にもなりました。生徒たちには苦労が多かったと思いますが、ニセコにしながら、国際的な環境に身を置いて働くとはどういうことか、実感として理解することができたのではないかと思います。

コロナの影響でマレーシア研修が中止になったことで、

身近なニセコエリアの新たな魅力や学びについて多く発見することができたことは、ニセコ高校にとって非常に価値があると感じています。「災い転じて福となす」ということわざがありますが、コロナ禍で海外研修が実施できなくなるという逆境によって、地元ニセコ町でのローカル研修という、これまで発想のなかった新たな研修を行うことができました。しかも、ニセコ研修でも英語をフルに使い、外国籍のホテルスタッフとの協働という国際観光業務を行う経験ができることを発見しました。ニセコ研修が将来のニセコを担い、創る人材の育成に直接つながっていくのではないかという手応えを感じました。今後コロナ禍が収束した後も、4年生研修では、従来の海外研修(マレーシア等)のみに限定せず、地元の利を活かしたニセコ研修をさらに加えたハイブリッド研修の可能性を模索したいと考えています。

今、ニセコ町は、SDGs 未来都市に選定され、町を挙げて自らが掲げたSDGsの目標達成に向けた取り組みを進めています。ニセコという地域の取り組みがそのまま世界のSDGsの取り組みにつながっていると私は考えています。ローカルな課題がローカルなままではなく、実はグローバルな課題につながり、それらと多くの点で共通しているということへの気づきが大切だと感じています。ただし、「グローバルが絶対いいんだ」「サステナブルが絶対いいんだ」というドグマ的な極端な考えには気をつける必要があります。生徒たちがニセコ高校での学習活動を通して、またニセコという地域社会でのSDGsへの取り組みに関わることを通して、多様な人々、多様な考え、多様な共生のあり方を認識し、認容できる力を養ってもらいたいと考えています。また、経験談に基づくグローバル人材講和や実践的な生きた海外研修・ニセコ研修などを通じて、生徒たちが将来観光業界などで活躍するのに必要なコミュニケーション力と語学力を少しでも高めていってもらいたいと思っています。

早くで分かりにくい部分もあったかと思いますが、何か質問等があれば、後ほどまたお願いしたいと思います。

以上です。

山川 中谷先生、ありがとうございます。山本副町長に続き、時間をきちんと守っていただきましたので、皆さんと質疑応答の時間を20分取ることができました。

私が改めてまとめる時間を取るのはいらないので、そのまま進めます。特にSDGs、自然環境だけではないという部分の多様性と、それを支える社会制度。先ほどの自治基本条例、国際交流員、地域おこし協力隊という制度的なものやラジオなど、いろいろな事例がありました。キーワードとして「多様性」が出てくるかと思いません。ご質問のある方、どうぞ、手を挙げていただいて、順番がずれてしまうかもしれませんが、質問をしていただければと思います。遠慮なくどうぞ。

チャットのほうにも質問が入ってきていますが、いかがでしょうか。中谷先生、見えますか。

中谷 「ニセコ高校での教育について、教育成果はどのように測りますか」というご質問ですが、私個人の考えでは、卒業生の進路、そしてその進路先で卒業生が活躍しているということが教育の成果になるのではないかと思います。具体的には、地域のニセコ町の観光業界や国内外の観光産業にどれだけ卒業生を送り込めたかということが主な指標となると考えます。そうした観光人材を輩出するために、教育活動においては、特に、生徒が主体的に物事を考えて行動する力の伸長に重点をおいています。個々の学習活動の場で、しっかりと話し合いに入れたか、明確に自分の意見を言うことができたか、自分の意見をまとめてわかりやすくアウトプットできるかなどといった能力の育成が大切だと考えています。

山川 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

山川 式部さんですね。どうぞ、お願いいたします。

式部 絢子 (秩父別町 多文化交流コーディネーター) ありがとうございます。こんにちは。秩父別町で多文化交流コーディネーターをしております、式部と申します。私も秩父別町で地域おこし協力隊を経験いたしました。貴重なお話を伺うことができ、感謝しています。

ニセコ町の副町長にお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか。ニセコ町は本当に有名な町なので、いろいろなメディアで拝見することがあります。新しく来た方、地域おこし協力隊、それから外国の方を受け入れるということで、すごく温かい町だなと思って見ております。

一方で、もともと暮らしていらっしゃる地域住民の方々は、多分、変化に対応できないというか、言い方は悪いですが、反発もあるのではないかと想像します。そういう方々の受け入れのマインド変化のきっかけにな

ることがあったのでしょうか。どんなことがきっかけで変わっていった、受け入れていったのかということをお伺いしたいです。

山本 (契) 山本です。ありがとうございます。ニセコ町長は「創造的摩擦」という言葉を使います。要するに摩擦があつて当たり前ということ。だからこそ受け入れている意味があるということもあります。

新しい価値観の方々が来るといろいろな摩擦が起きて「何だ、あいつ」となります。しかし、そこから本当の意味での交流であつて、これを恐れずいまいしょうという意味合いで、「創造的摩擦を起こす」という言い方をしています。摩擦は起こって当たり前と捉えています。

やはり中には、どうしてもなじめない人もいます。同時に、地元のアイデンティティーのようなものをきちんと尊重する気持ちを持つてる方は地域の溶け込みも早いという気がします。「私が、私が」という人よりは、その気持ちは少し隠しつつ、地域の文化のようなものを何となく尊重しようとしている人がやはり残っていくという感じがしています。

そういう方は例えば農家さんともすごく仲良くなって、結局、農家さんから土地を譲ってもらって農業者になれたということなど、よい化学変化が起きることがよくあります。

式部 ありがとうございます。もともといらっしゃる方はどうでしょうか。自分たちのアイデンティティーを強く持っていて、新しい方が来たときにどう折り合いを付けるのかといったところはいかがでしょう。

山本 (契) 本町はどちらかというと、新しく来た協力隊の方についてはとにかくまず懐へ入ろうという話をします。要するに、1年目はいろいろなところに派遣しながら、その場所で地元の人をよく分かってもらうということです。その中で地元の人的心境もだんだんと「ああ、よくやっているね」「じゃあ、ちょっと俺と何かしようか」という段階を踏んでいくことが必要だと思います。ただ、確かに最初のうちは「あいつら、何だ」という感じがありましたが、本町の場合は、そんなことには構わず、どんどんたくさんの人を採用していったので、今はあまり軋轢は感じません。協力隊もすぐなじんでいるというか、当てにされているという状況になっていると思います。

式部 ありがとうございます。とても参考になりました。

山本 (契) いえ、こちらこそ。

山川 もう1点、山本副町長宛てにチャットのほうで

質問が入っていますが、見えますか。梶並さんより、「D&Iの推進で苦勞された点があれば教えていただけますか」と入っています。

山本 (契) ごめんなさい。D&Iとは何ですか。

梶並珠美 (人事コンサルタント) すみません。ダイバーシティ、多様性のことです。

山本 (契) そうですか。ダイバーシティと、ちなみにIは何ですか。

梶並 Inclusion⁵です。いろいろな国や文化の方が入っていらっしゃるんですね。私は企業の人事畑で働いていましたが、企業がこれから取り組まなければいけないことをもうニセコさんは体現されていらっしゃるなと思います、とても感慨深く聞いていました。

山本 (契) やはり、摩擦を恐れないということだと思います。必ず摩擦が起きますし、その苦勞は当たり前だと思ってやっているということでしょうか。

梶並 ありがとうございます。

山川 他にいかがでしょうか。

白山 山川先生、白山です。山本副町長、中谷先生、非常に興味深い、中身の濃いお話をありがとうございました。

まず副町長に一つ質問がございます。2018年、SDGs未来都市にニセコ町が選定されて、すでに、3年ほどが経過していると思います。児童、生徒、学生、社会人、町民の方々も含めて、SDGsの理念と実践がどのぐらい浸透しているのでしょうか。また定着しているのでしょうか。それから、町を挙げてSDGsの理念と実践を行うために、町民に対してそのメッセージを伝えていくために、どのような努力をしているのでしょうか。今年、SDGsという言葉が日本社会でかなりブレイクしてきていると感じています。それでもまだ浸透していない部分もあるかと思います。先行して未来都市に選定されたニセコ町ではどのような状況か、お聞かせください。

山本 (契) SDGsのカードゲーム、SDGsの講演会、それらを通じてある程度、浸透しているところもあると思います。ただ、私自身はSDGsとは何だろうと考えたときに、もともと自治体は総合計画というものを持っており、今も基本的には総合計画とSDGsは概ねイコールなのだろうと思います。自分たちの町を、自分たちの生活をどうやってつくっていくのかということで、自治体は昔からそれに取り組んでいます。SDGsの全体像を

理解することより、その中の一つでもいいから、自分がどうやって自分事として取り組んでいくか、自ら考え行動していくかということが重要です。ですから、SDGsの歴史とか、SDGsの理念とは、という勉強は最初の1回、2回でよいのかなという感じはしています。ニセコ町は今、新しい市街地、街区に住宅群をつくるという大きな取り組みをしているところです。この事業を一つの突破口にして「それはもともとどんな考えで始めたのか。これが実はSDGsの考え方を取り入れているんです」とご理解いただく取り組みを進めていきたいと思っています。

白山 自治体の施策はそもそもSDGsだという発想ですね。よくわかります。山本副町長、ありがとうございます。中谷先生にも一つ、質問がございます。先生のお話の中で、子どもたち、生徒たちがこのSDGsの取り組みで価値観の違いや共通点を見つけて認め合う、認容という学びを通して、世界の課題と自分たちの課題の共通性に気が付くことが大事だというご指摘があり、非常に感銘を受けました。その視点が重要なのだと思います。

先生が観察された中で、もし感じたことがあったら教えていただきたいのですが、ニセコ高校の生徒が自分たちの地域課題が世界の課題と同じだ、あるいは直結していると感じることによって、自分たちの抱えている課題の意義を非常に深く認識して、その取り組みに対する意欲が変わったり、学習に深みが出たり、あるいは自分たちの問題を通じて、世界も共通だから世界の課題にも取り組みたい、世界の課題を解決したい、それに関わりたいという生徒も出てきたとおっしゃっていたと思います。語学力の習得も含めたそういった学習の動機の高まりであったり、世界との課題を共有することによって生徒たちの問題意識や学習意識が実感として変わったとお感じになった場面がありますか。もしあったら、そのあたりをお聞かせいただくとありがたいです。

中谷 ありがとうございます。今パッと良い例が思いつきませんが、SDGsの8の「働きがいも経済成長も」と言う目標に関連することと言いますと、生徒たちは、経済社会の一人の消費者という視点から実生活の中で、何をかうか、何を選ぶかという意識が質的に大きく変わってきていると感じます。例えば、チョコレートであれば、1枚100円か200円ですが、1枚1,200円のチョコレートを見たとき、以前であれば単純に「これは高すぎる」「意味不明」という印象レベルで終わっていました。しかし、なぜその1,200円という値段がつけられているのか考えたり、調べたりすることで、商品の価格は単純

⁵ インクルージョン。包括・包含。すべてのメンバーが参画する機会を持ち、それぞれの経験や能力、考え方が認められ活かされている状態を指す。

な仕組みで決められているのではなく、さまざまな背景や要因に基づいていることに気づくわけです。生徒たちは、チョコレート1枚から原料のカカオの生産・流通、チョコレートの生産・販売が国際的な貿易活動の中で行われていることを知り、チョコレートを通して世界とのつながりやフェアトレード⁶のことを理解するなどして、消費者側の視点に加えて生産・販売者側の視点を持てるようになってきていると思います。その意味で、目の前の身近なモノやコトが世界と直接的、間接的につながっているということにかなり意識できるようになっていると感じます。学習活動の中でも今まで気づかず、見えなかったものが見えるようになったり、表面的なものだけでなく、より深い部分を意識的に知ろうとする傾向が変化として見られるような気がいたします。

白山 ありがとうございます。

山川 ありがとうございます。最後にどなたかもう一方、もしご質問があれば、お伺いしたいと思います。いかがでしょうか。山本先生、どうぞ。

山本(祐) ありがとうございます。筑波大学人文社会系准教授の山本祐規子と申します。今日は山本副町長、中谷先生、ありがとうございます。

中谷先生にご質問させていただきたいのですが、先生のところは地域性を生かした教育ということで大変興味深く聴講させていただきました。その中で二つほど教えていただきたいと思ったのが、まず一つ、先生がグローバル人材の育成の講話を企画されるときに、実際、生徒に何が響くのかということに非常に大事にして企画されているとおっしゃっていたかと思えます。実際に、現場で、若い生徒さんにSDGsの課題の中で何が一番響く、あるいは彼らの心をつかむようなテーマになっているのか、肌感覚で結構ですが、教えていただきたいということが一つです。

もう一つは、高校4年制という非常に珍しい、とても興味深いプログラムをされています。希望者の生徒さんが残るということですが、大体何パーセントぐらいの3年生が希望者として、インターンシップ研修などを中心とした教育に残るのか、そして卒業した4年生はほとんどの人がローカル、ニセコ町での就職をそのままされるのかということをお教えいただければと思います。

中谷 ありがとうございます。グローバル人材育成というのはいろいろな学校で行われていますが、講演者だけ

が話して終わってしまっただけではもったいないので、今年度、本校で実施しているグローバル講話では、講話後に「ちょっとここはよく分からなかった」「この話は反応がすごくよかったね」と率直な意見を出してもらって、毎回フィードバックしつつ、ブラッシュアップしながら進めています。

高校1年生ですので、あまり世界の情勢が分かっているのは仕方ないところもあります。それでも講演者の先生方は、生徒たちが何かを学ぼうとするきっかけを提供したい、というお気持ちで積極的にお話をいただいています。例えば、グアテマラの話が講話のテーマだった回がありました。貧富の差や命の値段の話は生徒たちにも理解しやすい内容だったと思うのですが、実際に経験した人から直接お話を聞く機会というのは貴重で、生徒の方でも当たり前だと思っていた自分たちの立場が非常に恵まれているものだとということに気づき、自ら調べたことをもとに発言をしてくれました。

また先ほども触れた消費の問題ですが、ものの値段は誰が決めているのかということに関して、生徒たちはとても関心が高いです。環境に優しいものの値段は高いため、昔はそれを避けていたのが、理由を知ることによってそれを選ぶようになっていたり、そのことを親に教えてあげたりということがありました。生徒も消費者の立場に立つことで、社会の仕組みを学んでいます。

もう一点、最近では4年生から大学に進学する生徒が多いんです。4年生次の1年間でニセコエリアで研修を行い、自分は何を学ぶ必要があるのか、ということをしつかり考えた上で大学を選びます。自分の関心に従ってインターンシップを選択し、自分の適性を見極めた上で進学先を決定するという、充実した1年間を過ごしています。マレーシア研修に参加した生徒ははじめ英語がすごく苦手でしたが、結果として英語を学ぶ東京の大学に進学しました。4年生で自分の進路についてじっくり考える、ギャップイヤーのように活用している生徒が多いです。

今年の4年生はニセコエリアでインターンシップを経験したことで、地元で自分がどのように関わっていけるのかといったビジョンを具体的に描くことができ、「ニセコに残りたい」「ニセコに就職したい」と言ってくれています。こうした生徒が今後、地域で活躍してくれるようになってくれれば嬉しく思います。

山本(祐) どうもありがとうございます。

山川 ありがとうございます。すみません。時間になりつつあるのですが、山本副町長、最後に何か一言、皆

⁶ 公正な貿易。貧困のない公正な社会をつくるため、途上国の経済的社会的に弱い立場にある生産者と経済的社会的に強い立場にある先進国の消費者が対等な立場で行う貿易のこと。

さんであればお願いします。

山本 (契) 間もなく全国的にも喪が明けてくると思うので、ぜひニセコに来ていただきたいです。お寄りいただければ、町にお連れしたり、ニセコがやっている取り組みのご説明をしたりできますので、ぜひ泊まりで来ていただければと思います。

山川 ありがとうございます。中谷先生、最後に一言、お願いいたします。

中谷 ニセコ高校の教育について、いろいろと知っていただく契機になってくれたらうれしいです。今後、生徒たちとニセコにどういうことが必要なのかということをしつかりと踏まえながら教育活動に取り組んでいきたいと考えています。何かありましたら、また連絡いただければと思います。

山川 ありがとうございます。

今日は筑波大学のNipCAのプロジェクトと日本語政策学会多言語対応研究会との共催という形で、私は日本語政策学会の会長として司会をさせていただきました。いろいろとまたご質問があれば、事務局のほうに問い合わせさせていただければ、私からニセコのほうにつないで、できればお答えをさせていただけたらと思います。

本日はお忙しい中、ご講演いただきまして、ありがとうございました。そして、また皆さまのご参加もありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。それでは、これで終了となります。ありがとうございました。

白山 副町長、中谷先生、山川先生、本当にありがとうございました。

山本 (契) ありがとうございました。

中谷 ありがとうございました。

第26回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会

SDGs と多文化社会



—先駆的な試みを行う北海道ニセコ町—

モデレーター 山川 和彦 教授 (麗澤大学)

13:45 ~ 13:50 開会の挨拶 臼山 利信 教授 (筑波大学)

13:50 ~ 14:15

「SDGs 未来都市・環境モデル都市
ニセコ町の未来をつくる取り組み」

北海道ニセコ町 副町長 山本 契太 氏



14:15 ~ 14:40

「地域で取り組む多様性を育む教育」

北海道ニセコ高等学校 教諭 中谷 知記 氏

14:40 ~ 15:00 質疑応答

©「ニセコ町の未来をつくる」北海道ニセコ町役場企画環境課環境モデル都市推進係

日時

2021年 7月 8日 木

13:45 ~ 15:00

対象

このオンライン講演会は、どなたでも無料でご参加いただけます

※当日ライブ視聴できない本学学生・教職員の皆様のために manaba にて無料の動画配信を予定しております。
詳細は、講演会後下記 NipCA プロジェクト Website にてお知らせいたします。



主催：筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」
TEL: 029-853-4251 / Email: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Website: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp>

共催：日本言語政策学会多言語対応研究会

協力：日本・中央アジア友好協会 (JACAFA) / 筑波大学 国際局, 学生部,
グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会,
スーパーグローバル大学事業推進室, グローバルリーダーシップ教育プログラム,
人文・文化学群, 社会・国際学群

お申し込みはコチラから



筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」主催
公開講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」
第 26 回
SDGs 未来都市・環境モデル都市 ニセコ町の未来をつくる取り組み
北海道ニセコ町 副町長 山本 契太
地域で取り組む多様性を育む教育
北海道ニセコ高等学校 教諭 中谷 知記

2021 年 7 月 31 日

監 修 臼山 利信
編集・校正 梶山 祐治 (主担当)、山本 祐規子、谷越 祥子、笹山 啓
発 行 者 臼山 利信
発 行 所 筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」
茨城県つくば市天王台 1-1-1
Tel: 029-853-4251
E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>
印刷・製本 株式会社アイネクスト



筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Tel. 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>



公開講演会シリーズ第26回のテーマカラーは、国連が定めた17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」のうち、「目標9. 強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る」のアイコンの色を基調としています。